

随伴現象を表す類義表現の分析

－「につれて」「にしたがって」「にともなって」をめぐって－

呉 宜静

1. はじめに

日本語は語彙量の多い言語だと言われている。その中で多くの類義語が存在すると考えられる。そのゆえ、初級後半程度のレベルになると、語彙数が増え、類義語の使い分けが問題になってくるわけである。今まで類義語に関しては多くの記述分析が行われているが、日本語教育の場で指導に役に立つもの、あるいは日本語学習者の習得状況という観点から扱ったものはまだ少ない。第二言語習得研究における語彙習得研究は未開拓な分野¹であると思われる。李²(2003)は、「類義語の分析を行った辞書や辞典が数多く出版されるようになったが、研究面においては必ずしも十分とは言えないのが現状である」と指摘している。

ところで、類義語だけでなく、類義的な文法形式の使い分けも、学習者にとってなかなかわかりにくいように感じられる。その中で、語彙から派生したものや文法化したものが少なくない。本稿では取り上げる「につれて」「にともなって」と「にしたがって」の複合助詞（後置詞とも呼ぶ）は、やはり類義語を中心とする類義表現である。現代日本語の複合助詞については、言うまでもなく、多くの文型辞典に取り上げられているが、類義表現の意味的な使い分けやカテゴリーとしての体系的記述がさらに望まれている。また、各形式の成立過程については不明なものも多い。そこで、本稿では、動詞から派生した複合助詞「につれて」「にともなって」「にしたがって」を主として、これらの表現の意味的な本質を探りながら、用法間の関係を明らかにするのが目的である。

2. 従来の研究及び問題点

本稿で扱った「につれて」「にしたがって」「にともなって」の三つの形式の使い分けは微妙である。森田・松木の記述³(1989)では、「にしたがって」「につれて」の二つの表現を主として、動詞の連体形を受けて、変化の相関関係を表すが、単なる時間的な相関関係にとどまらず、「前件が原因・理由となって、後件が生じることも示す」とされている。が、両方の形式の使い分けについて触れていなかった。森田・松木(1989)のほか、これらの表現に関する多くの研究の

うち、個々の用法・意味機能の相違を論じているものとしては、さらに塩入(1999)、田中(2001)、劉(2006)などがある。これらの形式に関わる記述を次のようにまとめておく。

- ① この三つの形式は、漸進的な相関進行を表すが、「にともなって」は同時に事態の連鎖的発生と事由を表す場合が見られる。
- ② この三つの形式に共通する時間移動に関わる事態の連鎖的発生を表すが、「につれて」は自然移行的な事態に多く付き添うのに対し、「にしたがって」はそれに加えて人為的事態発生の状況にも用いられる。
- ③ この三つの形式はいずれも動詞「つれる」「したがう」「ともなう」から派生したものであるが、動詞「したがう」は「意図的な随行を表す」という特徴がある。
- ④ 前件に接続する動詞の場合、「につれて」「にしたがって」では基本形のみであるが、「にともなって」では基本形以外の夕形にも接続が可能である。
- ⑤ 主節の文末制限について、「につれて」は「にしたがって」「にともなって」よりも、文末制約が強い。従って、主文動詞の意志性は、「につれて」のほうが弱い。

まず、注目したいのは、③の記述である。劉⁴(2006)の記述によると、例(1)(2)のように、動詞「したがう」と「つれる」は同様にAがBと共に同じ空間まで移動することを表すが、例(1)の「したがう」の場合は、AとBは同じ空間に存在するのは、A自身の意図に基づいているのに対し、例(2)の「つれる」の場合は、Aの動作はBの働きかけを受けて成立するものである。従って、動詞「したがう」は「意図的な随行を表す」という特徴が付けられている。が、このような解釈は何となく不適切ではないかと思われる。問題は、どのような視点から動詞「したがう」と「つれる」の意味特徴を捉えているか、ということである。つまり、例(2)では、行動主体Bという視点から考えると、Aは行動主体Bの働きかけを受けて行為をするわけであり、主体Bは主に意図的にその行為をするが、Aは自分の意志性が全くないとは言えないからである。よって、

劉（2006）による分析は、これらの動詞の意味特徴を区別することができないのではないか。そのため、これらの動詞の意味特徴については、検討の余地がまだ残されているように思われる。

- (1) AがBにしたがって行く。
- (2) BがAをつれて行く。

また、二つ目の問題は、④の記述である。田中⁵（2001）の考察では、例(3)のように、「につれて」「にしたがって」が基本形（辞書形）のみ接続するが、「にともなって」では基本形以外のタ形にも接続が可能であり、この場合は「の」「こと」は義務的な成分であるとされている。が、例(4)(5)から見ると、「につれて」では基本形以外のタ形にも接続し得ることがわかる。よって、④の記述について、まだ明らかにされていないと言える。

- (3) 十月一日付で不動産関連会社を吸収合併したことに伴い、資産の評価替えなどを実施した結果、株式資本は五億円程度に増えたという。（日経1999. 11.2. 朝刊）
- (4) 大正十二年（一九二三年）普選案が国民全体の関心の焦点におかれたにつれて、婦人参政権建議案が初めて議会で提出された。（宮本百合子『女性の歴史の七十四年』）
- (5) 日本の新聞の歴史は、こうして忽ち、反動的な強権との衝突の歴史となったのであるが、大正前後、第一次欧州大戦によって日本の経済の各方面が膨脹したにつれて、いくつかの大新聞は純然たる一大企業として、経営されるようになって来た。（宮本百合子『明日への新聞』）

なお、⑤の記述では、これまでの研究において多く行われているが、ただ表層的な分析に止まっており、詳細な説明は見られない。友松他（1996）には、「につれて」の後に話す人の意向を表す文（「～するつもり」など）や働きかけの文（「～しましょう」など）は現れない、という記述がある。が、この記述に関わる説明は見られない。また、従来の研究では、「にしたがって」という複合助詞に重きが置かれるが、「につれて」「にともなって」の意味的特徴もまだ言及されていない。さらに、この三つの形式が複文の階層構造という観点から、どのように位置付けられるかについて、必ずしも十分に解明されているとは言えない。そこで、本稿では明らかにするのが次の通りである（「とともに」は、この三つの形式とはほぼ同じ意味を表すが、形式名詞による表現形式であるため、本稿では一応考察の対象外とする）。

- ① 先行研究を補い、それぞれの共通点と相違点を再

び検討することである。

- ② これらの表現の前件と後件に制限があるかどうか、また制限のある場合、それは何かを明らかにすることである。
- ③ 諸特徴に基づく「につれて」「にしたがって」「にともなって」の用法・意味を記述することである。
- ④ それぞれの動詞の意味特徴を深く探りながら、この三つの形式の派生過程（文法化）を分析することである。

3. 「につれて」の意味・用法

3.1 動詞「つれる」の意味特徴

本小節では、動詞「つれる」に関わる記述によって、「つれる」の意味特徴を考えることにする。諸辞書では（『広辞苑』『大辞林』による）、

- ① 携えて行く。従える。連れて行く。（『広辞苑』）
- ② …に従って、…に応じて。（「…につれて」の形で）（『広辞苑』）
- ③ ある物事の変化にともなって、移り動く。（『大辞林』）

などのように記述されている。動詞「つれる」の基本的な意味としては、「従える」「連れて行く」という他動詞である記述①に当たると考えられる。それに、記述③と④はほぼ同じ意味を含んでおり、動詞「つれる」の実質的な意味を失い、複合助詞「につれて」の形で用いられる。次、動詞「つれる」の例文を見ながら、基本的意味と派生的用法を考えてみよう。（下線は筆者）

- (6) 今度は奥さんも連れてきてください。
- (7) 犬をつれて散歩する。（『大辞林』による例）
- (8) 年をとるにつれて、忘れっぽくなる。（『大辞泉』による例）
- (9) 人質事件は、時間の経過につれて緊迫感が増やしてきた。

例(6)(7)のように、動詞「つれる」は、「自分が移動するとき、相手を一緒に移動させる」という意味であり、ある移動、行為を指しているため、指示的機能を持っている。例(8)(9)における「つれる」は、「一方の変化にともなって他方も変化する」という意味であり、「ある対象」を連れて行く行為ではなく、抽象的な行為を指している。これらの例から見ると、空間的な概念に止まらず、抽象的な動きという時間的な概念が生じることがわかる。よって、派生した「つれる」の用法は、抽象的な行為を指しているが、やはり指示的機能を持っているわけであると考えられる。

また、記述①のように、動詞「つれる」は、動詞

「したがう」に対応する他動詞「従える」の意味用法に当たる。森田⁶ (1977)によると、「AがBに従う」の文型で、Aが自分の意志でBの働きかけのままに身を処するのであるが、Bの意志でAを規制し服従させれば、「BがAを従える」という文型となる。よって、「BがAをつれる」に置き換えると、Aが自分の意志による判断が弱く、行動主体Bに引っ張られて行くという意味が強いと考えられる。それに対し、従来の研究によると、動詞「したがう」の場合、規制されて行動するA側は自分の意志による判断が強いと思われている。このように、働きかけや行為を受ける側という視点から考えると、「従属的な随行を表す」「付随的な行動を表す」という特徴を含んでいるのではないか。

3.2 複合助詞「につれて」の意味特徴

次、本小節では動詞「つれる」から派生した複合助詞「につれて」の意味・用法を扱うことにする。すでに述べたように、「につれて」の意味特徴について、管見によればまだ言及されていない。従来の研究によると、複合助詞「につれて」は「にしたがって」「にともなって」と同じように、漸進的な相関進行を示すということがわかる。また、前件と後件の変化に関わる記述によって、「につれて」の制約は、ほかの二つの形式と比べると、かなり強いと感じられる。まず、「につれて」の例文を次のように取り上げておく。(下線は筆者)

- (10) 舟の進むにつれて此小さな港の声が次第に聞こえだした。(国木田獨歩『少年の悲哀』)
- (11) 折々の季節につれて四辺の風物も改める。
- (12) 原因には単純でないものがある。一時、情勢の昂揚につれて個人としてみれば種々な点に鍛錬の足りない人々が運動に吸収された。(梶井基次郎『泥濘』)
- (13) 峯子にはまた少し別な心がかりがさし迫っていた。時局の推移につれて、海外貿易の仕事に変化が生じ、会社では事業を縮小したりそろそろ人減らしもはじめていた。(宮本百合子『今朝の雪』)

これらの例文から見ると、複合助詞「につれて」は、「時が経つにつれて」「年をとるにつれて」、あるいは対象の様態変化などの表現を用いるだけでなく、多くは自然現象、時代推移や社会情勢、当時の現勢などのような変化という視点を置いているように感じられる。例(10)では、前件にある持続性を表す事態「舟の進む」は、後件にある「港の声が聞こえだした」という事態よりも時間的に前であり、つまり前件と後件の出来事が何らかの時間的なずれがあると思われる。例(10)～(13)に示すように、時間的な変化は不変のものであり、後件にある事態はそれにつれて一定の方向へ変

わっていったり、或いはある状況が生まれたりする。よって、「につれて」は漸進的な相関進行を表すが、一方的な方向へ変化していくことに重きが置かれるという特徴を含んでいるのではないかと考えられる。

さて、「につれて」の前件に接続する動詞は基本形のみであるとされているが、次のような例文を取り上げてみると、「夕」形をとる場合もあり得ることがわかる。例えば、(下線は筆者)

- (14) 大正十二年(一九二三年)普選案が国民全体の関心の焦点に置かれたにつれて、婦人参政権建議案が初めて議会に提出された。(前掲例(4))
- (15) 日本の新聞の歴史は、こうして忽ち、反動的な強権との衝突の歴史となったのであるが、大正前後、第一次欧州大戦によって日本の経済の各方面が膨脹したにつれて、いくつかの大新聞は純然たる一大企業として、経営されるようになって来た。(前掲例(5))
- (16) ただいま丸善さんのお話にもありましたように、写真用フィルムというのは、最近のレジャー活動が拡大されたにつれまして急速に普及してきておりますけれども、業界全体といたしましては非常に小さいものでございます。(第081回国会 物価等対策特別委員会 第1号)
- (17) ところが時間が経ち容態が安定してきたにつれて、この不味な病院食でも待ち遠しくなってきた。1食ごとのカロリーがきちんと計算して料理してあるので、食べ過ぎるということはない。(『脳外科病棟の日々』)

などの例は、いずれも「夕」形を接続するものであるが、これらの表現は正しいかどうかを別として、やはりある場面で用いられている。「夕」形を取るのは、前件にある結果の持続性や出来事の状態という視点を置くのではないか。例(14)では、「普選案が国民全体の関心の焦点に置かれた」という事態の結果が持続的に残されており、それに続いて後件の「婦人参政権建議案が提出された」という出来事が引き起こされるという動きが現れる(図(1)参照)。前件に取る「置く」の意味は、「すでに存在する事物をそのままにする」という特徴を含んでおり、つまり「そのままの状態を残す」ということである。また、「動詞+てくる」のような用法、或いは「拡大する」「膨脹する」などの拡大の意を表す動詞類が多く用いられている。変化の意を表す「-てくる」は、ある状態から別の状態へと変化する過程を具体的に捉えた表現である。⁷このような用法は、変化の開始の意を帯びており、その過程によって、そののちにある状態が残されるように感じられる。よって、「夕形」を用いる場合、前件の事態を

A →-----▷ 結果の残存

B →

図(1)

発生した結果の残存と言う意味を含んでおり、その出来事の影響によって、後件の出来事が引き起こされるという特徴を持つと思われる。同様に、先ほど述べた「一方的な変化」という特徴は、「夕形」をとる場合、このような解釈が出来るのではないか。

なお、田中（2001）によると、「食べる」「読む」などの単独の動作動詞だけでは不自然な文になり、例(18)のように、複合動詞を構成しないとおさまりにくい。しかしながら、例(19)(20)において、「読む」「聞く」のような動詞を接続することがあり得る。それは、「また」などのような繰り返しの意を含んでいる副詞と共に起るからであろうか。また、例(19)では、作者は「主人公伸子はもう一遍、二遍、何篇も細かく読んだ」という認識を捉えているため、この場合は「読む」を用いることができるのではないかと考えられる。従って、「につれて」の前件は「漸進的、繰り返し」を示す内容が現れる。それに、これらのような随行を表す「につれて」「にしたがって」「にともなって」などの複合助詞がどのような場面で用いられるかどうかということは、前件に現れる副詞の意味特徴を考えなければならない。

- (18) 母からの手紙を読むにつれ、涙が込み上げてきた。(?) (田中 (2001) による例(13b) (→読み進む))
- (19) 伸子は、こまかくよむにつれて、張り合いのないような、くいちがっているような気持ちになった。(宮本百合子「道標」)
- (20) 昨今、ツルゲーネフの名を又きくにつれ、私はその女友たちの言葉を思い出した。(宮本百合子「ツルゲーネフの生きかた」)

4. 「にしたがって」の意味・用法

4.1 複合助詞「にしたがって」の文法化と保持

従来、多くの分析では、複合助詞「につれて」と「にしたがって」という二つの形式はともに扱われているが、詳細的に解明されているとは言えない。森田・松木（1989）は、「Aに従ってB」の形で、Aの動作・変化の進行に対応して、Bの動作・変化が進行することを表すが、AがBの原因・理由の性格を帯びている場合もある、と述べている。劉（2006）では、さらに動詞「したがう」の文法化と意味拡張のプロセスを

分析した上で、派生した複合助詞「にしたがって」への文法化を触れている。本節では、先行研究を踏まえて、動詞「したがう」の意味特徴を探りながら、派生した「にしたがって」の意味・用法を考え、さらにその文法化する過程で本来の性質が失われたか保持されているかということに触れてみたい。

2節では指摘した劉（2006）による動詞「したがう」の意味特徴については、再び検討する必要がある。前述のように、動詞「つれる」の場合は、働きかけや行為を受ける側（随伴の対象）という視点から考えると、「従属的な随行を表す」「付随的な行動を表す」という特徴を含んでいる。それに対し、森田（1977）の記述によると、動詞「したがう」の場合、規制されて行動するA側は自分の意志による判断が強いことが感じられる。つまり、AがBの後ろについていって、Bを合わせたり行動し、より主動的である。さて、次のような例文を取り上げ、動詞「したがう」の意味を考えてみる。(下線は筆者)

- (21) 部長にしたがってパリへ行く。
- (22) 生徒たちは引率の先生に従って歩いて行く。
- (23) 法に従って社会生活を営む。
- (24) 父は建築家の中でも、書齋で勉強するための人ではなく、人間の住む家を、様々なその必要の条件にしたがって、事務的に、家族的に、趣味的に建ててゆくという現実の進行を愛したたちでした。(宮本百合子「父の手帳」)
- (25) 太陽が沈んで行くにしたがって、温度がだんだん下がった。
- (26) 顔貌には疵があっても、才人だと、交際しているうちに、その醜さが忘れられる。また年を取るにしたがって、才気が眉目をさえ美しくする。(森陽外『安井夫人』)
- (27) 今後、通勤客が増えるに従って、バスの本数を増やしていこうと思っている。

例(21)(22)の場合、「後について行く」「随行する」という意味が含まれる。『広辞苑』では、「自分より強大なもの、不動・不変なものの權威や存在を認め、自分の行動をそれに合わせる」という記述が見られる。即ち、「部長」「先生」のような先導者のあとをついていくという意味を示す。また、例(23)のように、「社会生活を営む」ということを行う主体は、必ず自分の意図を持つ人間や高等動物であり、自分の意志による判断として受け入れる。それに、抽象的な事柄を表す場合、例(24)には見られるが、主体はやはり意志のある人間である。よって、劉（2006）による動詞「したがう」の意味特徴を改めて考えると、「主動的な意図による随行

を表す」という特徴を意味付けられる。

なお、例(25)(26)(27)における「したがう」の用法は、「随
行」という性質を表す動詞「したがう」の語彙的な意
味を失い、動詞「したがう」から派生した複合助詞「に
したがって」の用法へ転じたものであると思われる。
が、従来の研究⁸によると、これらの用法は基本的な
意味以外に原因や因果を前件事態に述べられており、
因果関係を強調することに特徴がある。また、これら
の例を考えると、劉（2006）が述べたように、話し
手は前件と後件の事態に対して必然的な認識として捉
えていることが感じられる。例(25)では、夜になると涼
しくなり、温暖もだんだん下がっていくわけである。
このような現象は不変のものである。例(26)に示すよ
うに、「顔貌には疵があっても、才人だと、交際してい
るうちに、その醜さが忘れられる」という前提がある
ため、話し手はこのような人が年を取っても、やはり
魅力に富んだ人であるという認識を捉えている。さら
に、例(27)から見ると、後件には話し手の意向を表す文
と共起が可能であることがわかる。それは動詞「した
がう」は「主動的な意図による随行」という特徴があ
るためではないか。それに対し、「につれて」の後件
には話し手の意向を表す文や働きかけの文が現れにく
いことは、動詞「つれる」の意味特徴のためであると
考えられる。

4.2 複合助詞「にしたがって」「につれて」の相違点

以上、動詞「つれる」と「したがう」の意味特徴を
探りながら、複合助詞「につれて」と「にしたがって」
の意味・用法をおおざっぱに触れてきたが、両方の形

式はともに変化の相関関係を帯びているという点につ
いて共通するが、やはり意味の差があると指摘されて
いる。まず、次の例文を考えてみよう。（下線は筆者）

(28) 政治の改革が進むにつれて、それに不満を持つ者
が多くなりました。

(29) 舟の進むにつれて此小さな港の声が次第に聞こえ
だした。（前傾例(10)）

(30) 加齢に伴う身体の変化により、一般的に高齢者に
なるにしたがい、歩行速度が遅くなりがちです。

(31) 工場建設が進むにしたがって、環境汚染への住民
の不安が増した。

劉（2006）の分析によると、「にしたがって」は「～
にしたがっても～ない」のような構文で用いられない
ことによって、「にしたがって」を用いる場合、話し
手は前件と後件の相関進行を必然的なものとして捉え
ていると説かれている。それに対し、「につれて」は
「～につれても～ない」のような構文で用いられると
いうことで、前件の事態が進行しても、関連する事態
の進行が発生しないことを表す。例えば、例(28)では、
「政治の改革が進む」という事態であると言っても、
不満を持つ者が多くなるわけではなく、政治の改革を
支持する者が多くなることもあり得る。それは当時の
社会情勢や景気によって後件にどのような事態を起
こるかということである。また、例(29)に示すように、「舟
が進む」という事態が持続性の意を帯びており、前件
の事態は途中で絶えずに続いていくが、後件の事態が
前件の事態によって引き起こされるのではなく、ある
予期できない出来事や観察される事態を表す。

	動詞「つれる」	動詞「したがう」
意味特徴	従属的な随行を表す。付随的な行 動を表す。	主動的な意図による随行を表す。

	複合助詞「につれて」	複合助詞「にしたがって」 ⁹
意味特徴	<ul style="list-style-type: none"> ① 漸進的な相関進行を表すが、 一方的な進行という変化行動 に重きが置かれる。 ② 時間的な相関進行を表すもの であるが、ある出来事の働き が他に及んで別の事態が引き 起こされるとい意味が派生 される場合もある。（影響） ③ 焦点が前件にある。（前件→ 必然性；後件→非必然性） 	<ul style="list-style-type: none"> ① 漸進的な相関進行を表すが、 相互的な進行という変化行動 に重きが置かれる。 ② 話し手は①を必然的なもの として捉えている。（意志性） ③ 時間的な相関進行を表すもの であるが、語用論的な推論に よって因果関係の意味が派生 される場合もある。 ④ 焦点が前件と後件にある。（必 然性→対応、相互関係）

さらに、例(30)の場合、一定の「年齢」の幅が意識されており、例(31)の場合は工場建設による環境汚染は必ず住民に被害をもたらしており、ともに現行事態の進行とその変動による影響が示されている。よって、「にしたがって」による後件の発生は、「につれて」よりも必然的な意味合いが強い。そこで、「につれて」は後件の出来事を引き連れる必然性のある前件の事態を強調するのに対し、「にしたがって」はやはりともに必然性を持つ前件と後件に重きが置かれると考えられる。それは、「にしたがって」は「につれて」よりも前件と後件の事態が相互や対応の繋がりが強いからである。さて、この二つの形式の相違点について、次のようにまとめておく。

5. 「にともなって」の意味・用法

5.1 動詞「ともなう」の意味特徴

前述のように、「にともなって」に関わる用法・意味記述は、すでに述べてきた「につれて」「にしたがって」と比べると、詳細的であるとは言えない。よって、本節では、動詞「ともなう」の意味特徴を探りながら、さらに複合助詞「にともなって」の意味・用法を分析した上で、「につれて」と「にしたがって」との相違点を明らかにする。まず、動詞「ともなう」の基本的な意味を考えてみよう。『広辞苑』では、次のように記されている。

① つれだつ。つれそう。いっしょに行く。つれて行く。

例：部下を伴って出張する。

例：学生たちを伴って京都めぐりをする。(森田(1977)による)

例：夫人を伴ってパーティーに出席する。(作例)

② 同時に生ずる。同時に生じさせる。つきまとう。

例：収入に伴って支出も増える。

のような記述を見ると、多義性を持つ動詞「したがう」とは違って、この二つの記述はほぼ同じであることが感じられる。動詞「ともなう」の表す文型としては、記述①の「AがBを伴う」と記述②の「BがAに伴う」という要素に基づいて構成されている。が、記述②は、動詞「ともなう」の基本的な用法ではなく、複合助詞「にともなって」の用法へ転じたものであると考えられる。動詞「ともなう」の記述①による文型の例から考えると、動詞「つれる」の基本的な意味によって構成される文型に近いということが見られる。つまり、どちらもAを主、Bを従のような関係として捉えている。が、動詞「ともなう」と「つれる」は、やはり差

異がある。「ともなう」の記述①による文型では、主体の場合は人間だけではなく、「危険を伴う工事」「事業拡張は資本金の増加を伴う」のような物事や事柄が主体になる場合も見られる。が、次のような例もある。(下線は筆者)

(32) 生徒たちは先生に伴って展覧会場を回る。(森田(1977)による例)

(33) 父にともなって博物館に行く。(『大辞林』による例)

例(32)(33)に示すように、「先生」「父」などという自分より権威のある人の行動のあとについて行く移動行為を表す。このような場合になると、「ともなう」の持つ基本的な意味としては、動詞「つれる」だけでなく、動詞「したがう」の特徴も重なるのではないか。即ち、「ともなう」の意味はほかの両形式にある「随行を表す」という特徴を含んでいると思われる。また、森田(1977)の記述¹⁰では、動詞「ともなう」とは、二つの物事や人間の、一方が生じて行われ、または行為するとき、他方がそれにつれて一緒に存在するということを示すと説かれている。それに、『大辞泉』の記述を調べてみると、動詞「ともなう」の後ろ「なう」は本来は接尾語であるということがわかる。つまり、史的推移によって「とも」が付いて成り立つ語である。そこで、同じような随伴現象を表す「とともに」の意味特徴とは何らかの繋がりを持つと思われる。「とも(共)」は、二つ以上の事物が別々でない状態を表す。それによって、動詞「ともなう」は、ほかの二つの形式よりも、「同時性」を持つものであるということが見られる。よって、動詞「ともなう」は、「同時的な随行を表す」という特徴が意味付けられる。

5.2 複合助詞「にともなって」の意味・用法

さて、5.1節では、動詞「ともなう」の記述②は、基本的な用法だけではなく、複合助詞「にともなって」の用法へ転じたものであると説いた。この場合、先ほど述べた「BがAに伴う」「Aに伴うB」という文型によって表されているが、主体は人間ではなく、出来事や事柄になるわけである。森田(1977)の説いたように、「BがAに伴う」「Aに伴うB」「Aに伴ってBが…する」という文型がある。次のような例を見られたい。(下線は筆者)

(34) 人口増加に伴う住宅問題。(『大辞林』による例)

(35) 噴火に伴って付近に群発地震の発生することもある。(森田(1977)による例)

(36) 大気圏における炭酸ガスの増量に伴って生ずる温室効果。(森田による例)

(37) 交通量が増えるに伴って、体の不調を訴える人も

増加した。

- (38) 人質事件は時間の経過に伴って、解決が難しくなってきた。

において、例(34)に示すように、連体修飾化の形態という用法は、複合助詞「にともなって」の特徴であると言える。このような場合では、一方的ではなく、つり合いが取れるように感じられる。そのため、複合助詞「につれて」とは違って、前件と後件の事態が「双方向的な関係」を持つと考えられる。が、「にともなって」の前件と後件の事態を見ると、後件にはすべて変化の過程を示すのではなく、例(35)に示すように、ある付帯現象や結果の形で表す。例(35)(36)において、「噴火」「炭酸ガスの増量」のような事態が発生したからこそ、あとの事態が生まれるわけであるが、噴火のような現象を発生するといっても、必ずしも群発地震を引き起こすとは限らない。同様に、例(37)の場合、前件の「交通量の増加」という原因によって後件の「体の不調を訴える人が増加する」のような事態だけが引き起こされるわけではなく、ただ起こる可能性のある事態を示しており、よい現象や結果をもたらすこともある。複合助詞「にしたがって」のように、話し手は前件と後件の事態がともに必然的な認識として捉えているが、「にともなって」を用いる場合、変化の過程だけでなく、ある付帯現象や結果が現れる。よって、複合助詞「にともなって」の意味特徴は「につれて」により近く、後件の事態を引き連れる前件に重点が置かれると思われる。が、「にともなって」の前件と後件の事態はほぼ同時的である。そこで、その文法化する過程によって本来の性質が保持されているかどうかと言えば、複合助詞「にともなって」の場合は、動詞の実質的な残存性がほかの二つの形式より強いと考えられる。

さらに、前述のように、「にともなって」の前件に基本形以外にも「夕」形をとることがある。2節に挙げられた例(3)では、「不動産関連会社を吸収合併する」という結果の契機によって、後件の事態が引き起こされるわけである。が、前件に「夕」形をとる場合はやはり使用の制約がある。例(39)において、引き起こされた後件の事態は、単なる行為を表すのではなく、「転換する」のような変化を表す動詞が現れてくる。それに対し、前件に基本形をとる場合、例(40)のように、付帯現象や結果を示す後件に変化を表す動作だけでなく、「南下する」のような単にある行為を表す動詞も用いられる。前件に「夕形」をとる用法は、複合助詞「につれて」の前件にも見られる。よって、「につれて」は「契機による変化関係」という特徴が含まれると考えられる。が、この二つの形式は、発生の両事態には

時間のずれが見られ、やはり意味の差異がある。

- (39) しかし、その後取扱ったオベルの販売が低迷、ヤナセも経営不振となった。このため、ヤナセは経営体制を一新したのに伴ってBMWの取扱い、アウディの販売再開などで輸入車のデパート化戦略に転換している。(ニュース「ヤナセがVW販売に再参入…13年ぶりに雪解け」<http://response.jp/>)

- (40) ひめゆり学徒隊が砲煙弾雨の中、負傷兵の看護や死体処理、医療器具薬品の運搬、食事の世話などをしつつ、南風原陸軍病院が南部に撤退するのに伴って喜屋武半島まで南下したのです。

6. 今後の課題

本稿は、動詞「つれる」「したがう」「ともなう」の意味的な本質を探りながら、複合助詞への文法化を明らかにした上で、各用法間の関係を触れるものである。「につれて」は「より自然的に観察される変化の事態」を表しており、焦点は後件の事態を引き連れる前件に重きが置かれる。「にしたがって」は「因果関係による必然的な両事態の発生」を表しており、焦点はともに前件と後件の事態に置かれる。「にともなって」は「付帯関係のある両事態の発生」を表すものであり、前件と後件の事態はより同時的に発生し、時間的には殆ど重なるように感じられる。が、この三つの形式には微妙な差異を持っており、それぞれの相違点について再検討の必要がある。そのため、多くの例文や資料を集め、その中にある場面や状況を考えながら、認知意味論に基づいてこの三つの形式に関わる相違点の分析を進めるのが今後の課題である。

注

- 1 語彙習得研究の遅れについて、長友和彦(1999)は、「日本語の習得研究の中の落とし穴とも言える未開拓領域」と指摘している。また、谷口他(1994)は、「従来の第二言語習得研究では、文法と音韻については多くの調査研究がなされてきたが、語彙は比較的等閑視された分野であった」と述べている。
- 2 李 澤熊(2003)「副詞の類義語分析—どことなく、何となく、それとなく—」『日本語教育』116号 P.70
- 3 森田良行・松木正恵(1989)『日本語表現文型』アルク P.88, P.111-112
- 4 劉(2006)「「したがう」の複合助詞化、接続詞化」台大日本語文創新国際学術研討会論文集 P.113-114
- 5 田中 寛(2001)「漸進性をあらわす後置詞—“—につれて”などをめぐって—」『大東文化大学紀要<人文科学>39号』大東文化大学 P.110-112
- 6 森田(1977)『基礎日本語—意味と使い方』角川書店

P.228

- 7 森田良行（1994）『動詞の意味論的文法研究』 明治書院 P.95
- 8 森田・松木（1989）は、「Aに従ってB」の形で、Aの動作・変化の進行に対応して、Bの動作・変化が進行することを表すが、AがBの原因・理由の性格を帯びている場合もある、と述べている。劉（2006）は、さらに語用論的な推論によって、動詞「従う」は因果関係の意味を含んでいると説いている。
- 9 記述②と③は劉（2006）によるものであるが、筆者はさらにほかの記述を加えた。
- 10 森田良行（1977）『基本日本語－意味と使い方』 角川書店 P.347

参考文献

- 森田良行（1977）『基礎日本語－意味と使い方』 角川書店
森田良行、松木正恵（1989）『日本語表現文型』 アルク
森田良行（1994）『動詞の意味論的文法研究』 明治書院
谷口すみ子、赤堀侃司、任都栗新、杉村和枝（1994）「日本語学習者の語彙習得－語彙のネットワークの形成過程－」『日本語教育84』 日本語教育学会
長友和彦（1998）「第二言語としての日本語の習得研究」『第2言語としての日本語の習得に関する総合的研究

（平成8年度～平成10年度科学研究費補助金研究成果報告書）』、9-14

- グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』 ころしお出版
塩入すみ（1999）「「変化の連動」を表す副詞節の分析－トモニ・ニツレ・ニトモナイ・ニシタガイー」『東呉日本語教育学報22：69-89』 東呉大学日本語文学系
田中 寛（2001）「漸進性をあらわす後置詞－“－につれて”などをめぐって－」『大東文化大学紀要（人文科学）39：97-122』 大東文化大学
庵功雄、高梨信乃、中西久実子、山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク
李 澤熊（2003）「副詞の類義語分析－どことなく、何となく、それとなく」『日本語教育116』 日本語教育学会
劉 怡伶（2006）「「したがう」の複合助詞化、接続詞化」台大日本語文創新国際学術研討会論文集

参考辞典

- 『大辞林 第二版』：<http://dic.yahoo.co.jp/>
『広辞苑 第五版』 岩波書店（電子辞典）
『用例出典』：青空文庫：<http://www.aozora.gr.jp/>

ごぎせい／台湾・国立台湾大学 修士課程3年